

海老神社 奉納歌額

まえがき

明治三十五年（一九〇二）は菅公没年から数えて、千年目であり、海老神社では歌会が催されました。菅公とは菅原道真のことで海老神社の祭神でもあらせられます。「菅公一千年祭奉額」「菅公一千年祭献詠歌」と書かれた二枚の額が奉納されており「菅公一千年祭奉額」は「聴秋」と「十湖」の両者が撰者となっている俳句と短歌です。一方後者の「菅公一千年祭献詠歌」は短歌です。「催王奉額者戸田斧（当時海老に在住）」となっており、明治三十五年五月二日と記載されています。前者の奉額は明治三十五年寅年暮春とあり、二つとも同じ日、または同じ時期に歌会が催されたと思われます。『松下家年代記』には明治三十五年五月二日に、氏神様で歌会が催されたことが記されています。この歌会には海老はもとより渥美、下津具などの遠方からご参加いただいたことがわかります。また、「天」「地」「人」と書かれた和歌がありますが、これは「お題」であったと思われる。「天」は神を崇める歌、「地」はこの海老の地を讃える歌、「人」は人々の慶びの気持ちを表現した歌であろうと推測できます。

海老神社の拝殿にはもう一つ、短歌の額が奉納されています。大正八年に奉納された額です。日付は記載されていませんが、この日、神楽が奉納されたようで、神楽について詠っている短歌が多くありました。この歌会がなぜ開催されたのか、そ

の目的は不明です。

このように、三枚の額が拝殿に奉納されていましたが、いずれの板も経年劣化が激しいため、令和四年三月二十日の祈年祭の後、歌の書かれた板を一枚ずつ額から外し、和紙に包んで桐箱に保管いたしました。一枚ずつ写真撮影し、文字の判読をいたし、冊子にしたものが本書です。裏面に記載されている板もありましたが、書き損じたため表に書き直したようです。また、大正時代に書かれたものには「姓名いろは順」とありますが、順番通りには並んでいませんでした。移し替える際に入れる順番を誤ったと考えられます。額は劣化が少ないことから昭和か平成の時代に額のみ新たに作り替えたと推測されます。平成十六年に拝殿が建て替えられていますので、そのとき、額を新たにした可能性が高いと思われます。本書では令和四年三月に板を外した時点での順番で掲載しています。

すでに百年以上の時が過ぎ、これから数年後、この額を見る未来の皆さんに、できる限り現物に近い状態で見て頂きたいとの想いをこめて、拝殿より外して保管いたしました。昔の人たちが詠じた心を受け継ぎ、未来の人たちにその心を引き継いでいきたいと思っております。それが今を生きる私の気持ちでもあります。

令和四年八月十五日

海老神社 宮司

松下恒雄

凡例

・本書は以前、ワープロにて作成された印刷版を参考にしている。いつ、誰が作成したのか記載はないが、林正雄氏の「朱筆に従い」という記述があり、判読の参考にした。特に墨がかすれて判読できない文字は故林正雄氏の判読を採用させていただいた。

・変体仮名が多用されているが、現行の仮名に置きかえて表記した。漢字表記と仮名表記が混在しているが、原版にそって記載した。例としては、「神」と「かみ」である。

・作者の下に所在地が小さな文字にて二行で書かれているが、本書では同じ大きさの文字で記載している。そのため、現物のイメージとは異なっている。

・歌会が催された当時の掲載の順番とは異なっていると思われる。右から順番に並べたのか、左から順に並べたのかも判別できない。したがって、本書では令和四年三月時点の右側から並べてあった順に掲載している。

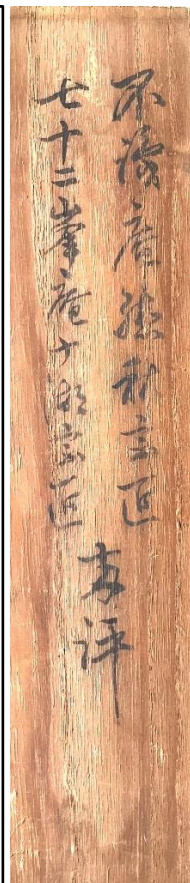
・「管公一千年祭奉額」を第一項としたが、書籍に残すための便宜上であって、順番に意図はない。

目次

第一項	管公一千年祭奉額	2
第二項	管公一千年祭献詠歌	6
第三項	納組音楽連献詠歌	9

第一項

「管公一千年祭奉額」



不識庵聴秋宗匠

両評

七十二峯庵十湖宗匠



天

神酒口の弊にも董れ 神の梅

笑雪

萬代のりやうへんしんがのえいしんのたまはて
るふゆのむつ 七 香ふふゆのむつ
岩崎國信 本郡

萬代の まつもさかえて この春は
うめやむかしの 香にははふらむ
岩崎國信 本郡
杉平

また寒き 春を開くや 梅の花
神詣て さそはれる日を 衣更
双樹 里江

散りかかる 梅の下行 牛車
おもむきは 風の産出す 極かな
戸生 素涼

散りかかる 梅の下行 牛車
おもむきは 風の産出す 極かな
戸生 素涼

明治三十五年 寅年 暮春
紅鬚連

明治三十五年 寅年 暮春
紅鬚連

選者少教正 竹尾正久 八名
大神の 千代はきた野の うめの花
ことさら清く 薰りそめけむ
加茂

選者少教正 竹尾正久 八名
大神の 千代はきた野の うめの花
ことさら清く 薰りそめけむ
加茂

香は園の 夜にもかくれす 園の梅
池月

香は園の 夜にもかくれす 園の梅
池月

千歳経し梅の香猛き董り哉 對川
主なき家にも梅のかきりけり 溪水

千歳経し 梅の香猛き 董り哉
主なき 家にも梅の かきりけり
對川
溪水

見あくれは 寒き董りや 谷の梅 双樹
梅清し 千歳のけふも 董りけん 里月

見あくれは 寒き董りや 谷の梅
梅清し 千歳のけふも 董りけん
双樹
里月

氏神の 社に高き 蟻の塔 池月
白梅の 盛りや清き 神の庭 双樹

氏神の 社に高き 蟻の塔
白梅の 盛りや清き 神の庭
池月
双樹

赤心は 色香に見せて 梅の花 笑雪
進む世に おくれす咲くや 梅のはな

赤心は 色香に見せて 梅の花
進む世に おくれす咲くや 梅のはな
笑雪

教導職試補 松下今朝造 本郡
神垣にかきりもふかき うめのはな 海老
千とせふれとも 猶にほふらむ

教導職試補 松下今朝造
神垣にかきりもふかき うめのはな
千とせふれとも 猶にほふらむ
本郡
海老

撰者五等学正 富田良徳 渥美
うつされし つくしの梅の 底よりも 豊橋
ふかきは君か ころろなりけむ *志し「可」は重複?

撰者五等学正 富田良徳
うつされし つくしの梅の 底よりも
ふかきは君か ころろなりけむ
渥美
豊橋
*志し「可」は重複?

老樹ほと おもむき多し 梅の花

老樹ほと おもむき多し 梅の花
地
溪水

古の河原に 梅の香 誘ひけり

はつあかり 窓の梅か香 誘ひけり
撰者
聴秋

昔は梅と ともに開けて 千代の春

世は梅と ともに開けて 千代の春
神垣や 人のさはけぬ 梅の花
溪水
六十翁

梅が香や 天拝山の あさほらけ

梅が香や 天拝山の あさほらけ
撰者
十湖

牛部屋の 軒にかんはし 梅の花

牛部屋の 軒にかんはし 梅の花
三井は晴れ 瀬田は夕日の 時雨哉
撰者
對川

月ヶ瀬は 梅に黄昏 後れけり

月ヶ瀬は 梅に黄昏 後れけり
梅一輪 春魁けて 薫りけり
對川
月生

第二項

「菅公一千年祭献詠歌」

菅公一千年祭献詠歌

敬詠催主奉頌者
 戸田斧

献詠催主奉頌者

明治三十五年五月二日

戸田斧

地
 権少講義 戸田斧

地

権少講義 戸田斧

菅原の神のいさをは 千代ふれと

いまも残れり 書につたへて

海老

本部

松下理平
 有年豊上を修けりききりふ風はさき

松下理平

本部

うめのはな さけるさかりに 風あれて
 ちりたし君を しの不けふかな

海老

地
 郷社八幡神社 夏目伊録

地

郷社八幡神社 夏目伊録

いさ見ども あふけやあふけ 久かたの

あめにみちたる 神の御蔭を

下津具

北設楽

天
 郷社東照宮社司 山内巖雄

天

郷社東照宮社司 山内巖雄

いかに君 したひましけん たまはりし

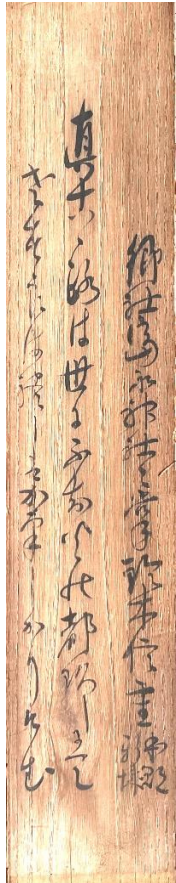
みけしの袖の ふかさかきりを

信楽

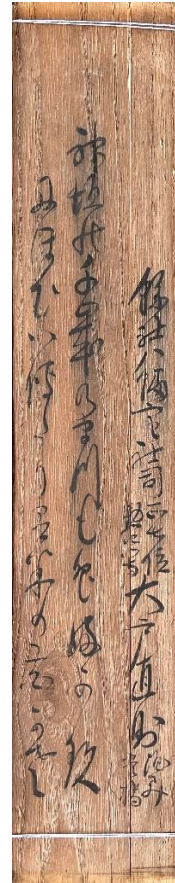
本部



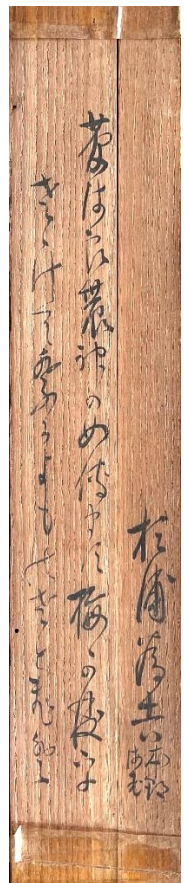
人 権中講義 松下尊誠 本郡
 くもりなき ころつくしに あり明の 海老
 月は残りて あふかるるかな



郷社富永神社々掌 鈴木信重 本郡
 真ころは 世に不知火の つくしにて 新城
 さすらはれしは かなしかりけむ



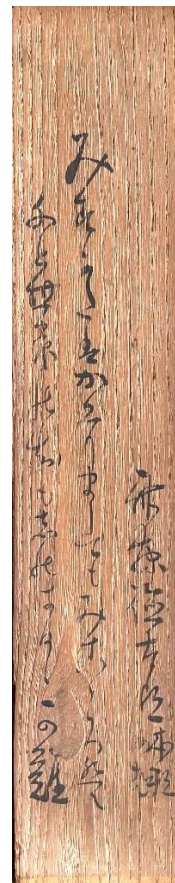
郷社八幡宮社司正七位勲四等 大戸直助 渥美
 神垣の 千歳のまつも 色ふかく 豊橋
 にはひいでたり 梅の花かさ *板が縦に割れており、糸で括った。



杉浦為吉 本郡
 菅はらの 神のめでます 梅か枝を 海老
 さはけて祭る よものさざひと



伊藤増三郎 本郡
 我くにの 其名もたかき 神かきの 海老
 うめのかほりは 久しかりけり



竹藤經太郎 本郡
 みすかたは かくれましても みころは 海老
 千とせのちも しのはるるかな

人 権大講義五等司業 原田直茂
春雨のふるき千年のまつはらに
みどりもふかくにはふうめか枝

人 権大講義五等司業 原田直茂
春雨のふるき千年のまつはらに
みどりもふかくにはふうめか枝

戸村茂市
名もたかく世に聞へたる菅はらの
かみの千歳をいははふはなし

戸村茂市
名もたかく世に聞へたる菅はらの
かみの千歳をいははふはなし

稗井興惣作
夫の道に功績も高き菅はらの
神の千歳のまつりなりけり

稗井興惣作
夫の道に功績も高き菅はらの
神の千歳のまつりなりけり

小石武平治
歳とせもまたいくとせもたふとくそ
名ののこりける菅はらの神

小石武平治
歳とせもまたいくとせもたふとくそ
名ののこりける菅はらの神

みな人のあつきこころの言の葉を
おとめまつらむ神の御前に

みな人のあつきこころの言の葉を
おとめまつらむ神の御前に

原田米一
大神の千とせまつりに神酒あけて
まなひの道をたのみまつらむ

原田米一
大神の千とせまつりに神酒あけて
まなひの道をたのみまつらむ

か
 権少講義 伊藤佐太郎
 本郡
 海老

かしくも 文ゆむ人は どりわけて
 いさまつらむ 管はらのかみ

人
 松井義郎
 北設楽

枝かはす 松のみどりに ならひつ
 ちとせにはふ 神垣のうめ

第三項

「納組音楽連献詠歌」

納組音楽連献詠歌
 姓名いちは順

稗々井豊吉
 うふすなの 神のみ前に 友とちと
 こころあはせて はやすみ神樂

小野田林弥
 笛つみ しらへ床しく 聞ゆなり
 かみのみ前の み神樂の声

稗々井豊吉
 うふすなの 神のみ前に 友とちと
 こころあはせて はやすみ神樂

戸田芥吉
うちはやくる 花火の音に きそひつ
笛の音たかき かみのひろ前

戸田芥吉

うちはやくる 花火の音に きそひつ
笛の音たかき かみのひろ前

夏目勘四郎
うちはやす 笛につつみの にきはしき
けふうふすなの 祭りなりけり

夏目勘四郎

うちはやす 笛につつみの にきはしき
けふうふすなの 祭りなりけり

加藤興一
うふすなの かみをなくさみ 神樂の
笛につつみの 音のかしこき

加藤興一

うふすなの かみをなくさみ 神樂の
笛につつみの 音のかしこき

松下正臣
鈴の音の すかすかしくも 聞ゆなり
神代なからの 古き手ふりに

松下正臣

鈴の音の すかすかしくも 聞ゆなり
神代なからの 古き手ふりに

鈴木玄四郎
おのか身の すかすかしくも たのしみは
神樂つとむる 夜半にそありける

鈴木玄四郎

おのか身の すかすかしくも たのしみは
神樂つとむる 夜半にそありける

松下今朝造
鈴の音の すかすかしくも 神さひて
手ふり床しき 神のみ神樂

松下今朝造

鈴の音の すかすかしくも 神さひて
手ふり床しき 神のみ神樂

原田金水
思ふとち 笛につみの しらへにて
かみをなくさむ けふのみまつり

原田金水
思ふとち 笛につみの しらへにて
かみをなくさむ けふのみまつり

山岩倉庄太郎
ちはやふる 神代なからの み手ふりを
つとむる身こそ たのしかりけれ

岩倉庄太郎
ちはやふる 神代なからの み手ふりを
つとむる身こそ たのしかりけれ

夏目善重
み神樂の 笛の音たかく 聞ゆなり
かみもめててや きこしめすらむ

夏目善重
み神樂の 笛の音たかく 聞ゆなり
かみもめててや きこしめすらむ

奉 大正八年
納 権少講義
七十翁 戸田斧吉

奉 大正八年
納 権少講義
七十翁 戸田斧吉

あとがき

江戸時代に海老神社で田楽が行われていた事を令和三年に京都芸術大学の卒論で発表させていただきました。海老神社には田楽の面が残っていたことで田楽が行われていた事の証明となりました。その面の横には田楽では使用しない笙（しょう）が保管されていました。不思議に思っておりましたがその理由が今回の額に納められていた歌の内容から神楽に使用されたのだろうと推測することができました。海老神社では大正時代に神楽が行われていたことは事実といえるでしょう。ただし、継続されてきたのか、いつ頃まで行われていたのか、大正時代に特別な行事において神楽が奉納されたのかは現状ではわかりません。

和歌の内容を紐解くと、海老神社の神々への崇敬の念、人々の自由で大らかな心情が如何なく発揮され、その表現の素直さに感嘆いたします。これらの歌から海老神社の昔の様子や心を寄せ合いながら人生を謳歌する人々の姿が私の脳裏に浮かびあがってきます。昔の良き時代、と感慨に耽るだけではなく、いまの時代、この海老に生きる私たちの心は離散してしまっているのではないだろうか、そんな自責の念にかられるのです。

神の存在を証明するものはありません。人には心があることを証明するものも勿論ありません。自然の中に神を感じとるように人の心を感じることでお互いが信頼できるようになるのではないのでしょうか。お互いの信頼を取り持つ海老神社であってほしいと願っております。

戦争や暴力が人類に無意味であることを世界の人々が共有できることを心よりお祈りいたします。

戦後七十七年

令和四年八月十五日

海老神社 宮司 松下恒雄

2022年8月15日 第1刷 発行

非売品

編集者 松下恒雄
発行者 松下恒雄

〒441-1943 愛知県新城市海老字池貝津80

発行所 里山出版

電話 0536-35-0452

印刷・製本 印刷通販プリントパック